城里町の文化財さんぽ（四七）

町指定文化財（工芸品）「香象（こうぞう）」

指定年月日／昭和五七年七月二四日
所在地／城里町那珂西
管理・所有者／宝幢院

町指定文化財「香象」は、象の形をした香炉（こうろ）で、真言密教の世界では灌頂（かんじょう）の儀式に欠くことのできない重要な法具の一つです。灌頂とは、如来（にょらい）の知恵を象徴する水を弟子の頭に注いで一定の資格を備えたことを証明する儀式です。灌頂を受ける僧は、灌頂道場の入り口に置かれた香象を跨（また）ぎ越えることで身を清め、道場に入室するのだそうです。

香炉の全長は三六センチメートル、高さは一三センチメートル程です。材質はケヤキで、下顎部のみを別彫りして組み合わせています。象の背中に蓮弁（れんべん）を彫り、その中央に香（こう）を焚（た）くための炉を設け、腹部には内刳（うちぐり）を施しています。表面の彩色はほとんど剥落（はくらく）していますが、所々に白色の塗料が残り、耳と口は赤、牙と歯は金色に塗られています。愛らしい形状ですが、眼は鋭く切れ上がり、威嚇の表情をしています。

製作年代は、室町時代初期で、県内に残る香象中では最古級のものとされており、その存在は宝幢院が密教道場として格式高い寺院であったことを窺わせます。

余談ですが、「香象」という言葉には二つの意味があります。一つは、発情期の象のことで、この時期の象は香気を発し、その力は制御困難なほど強大なのだそうです。もう一つは、青色で香気を帯び、河や海を歩いて渡るという伝説上の象です。法具としての香像は、このような強大な力を持つ象にあやかって生み出されたのでしょうか。

解説文／町文化財保護審議会会長 小山映一

問合せ 教育委員会事務局
☎029-288-3135

文芸しろさと

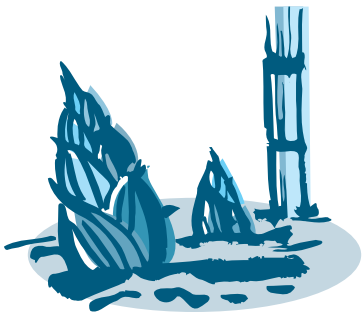
俳句

牧開きトランペットの谺して　綿引　英子
来し方は秘めて語らず古雛　今瀬　多代美
日だまりや芽を大切に牡丹植う　森　静江
長雨や桜蕾の弾けさう　瀬谷　博子
山のをちこち山桜咲く気配　中野　千賀子
地味な色どほし雀とつくしんぼ　竹内　幸子

俳句会道々白し梅の花　岩下　金司
日の暮れてなを梅林の仄明り　田口　勝元
予後の母下萌に立ちみづみづし　仲田　まちゑ
校庭をうずめつくして花ふぶき　寺門　孝子

川柳

救急車行く先気になる過疎の村　富田　多蔵
ここを右誰にも親切ナビの声　車田　綾子
十連休先立つものはと親あわて　川原　清
今日また「えごま油」かけてナットーくー　飯村　孝一

短歌

ユズの香の満つる湯舟にくつろぎて今日のストレス洗ひ流さむ　杉山　みちこ
切干しを作りて陽射し受けとめぬ蒼深き空真冬日の朝　大森　久子
夕さりて家々に明り点りゆくそれぞれの生活（たつき）愛しむごとく　渡辺　千紗子
朝なさな茶水を供へて香たきて先祖に今日の無事をし祈る　所　美恵子
柊に鰯の頭刺す行事嫁なりし日の昔を恋ふる　佐川　あや
山茶花に二羽の小鳥が飛び交ひて花散らしをり春近づきぬ　山形　式妙
もちの木の大樹の根元に赤き実をひそとつけたる藪柑子（やぶこうじ）いとし　島　愛子
過ぎし日の重ねし苦楽（くらく）語り合う友ありてこそ老いて幸せ　信田　育子
発表会間近に控え「早春賦」歌う窓辺に椿咲き初む　萩谷　登喜子
千波湖を見晴らす崖に咲き満ちる紅白の梅に人等見惚（ほ）るる　冨田　佐智子
毎日を心晴ればれ時過ごす健康一番笑顔が大事　富田　欽子
腹を割りみんな話せた友は今遠い施設に入りて淋しい　薗部　光子
孫息子今日より春の制服でペダルを踏めば髪がなびけり　矢次　洋平